

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02150

研究課題名(和文) 精神障害者向けグループホーム職員の感情知性を育む研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Research and Development of a Training Program to Foster Emotional Intelligence in Group Home Staff for the Mentally Disabled

研究代表者

水野 高昌 (MIZUNO, Takamasa)

帝京平成大学・健康医療スポーツ学部・准教授

研究者番号：60458552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)： 精神障害者向けのグループホームに従事する10名を調査対象とした訪問によるインタビュー調査を実施した。結果をまとめ千葉県作業療法第11巻1号に投稿・受理され掲載された。また、精神障害者向けグループホーム職員への研修企画担当者に対するインタビュー調査を実施し、研修プログラムの開発の必要性と研修プログラムの内容に関する提案を得た。これらの結果をまとめ帝京平成大学紀要第33巻に投稿・受理され掲載された。以上の研究成果を踏まえての専門家会合を開催し、プログラム試案の採否および内容の検討に関して、追加すべきプログラムなどの提案を受けて、研修プログラム案の作成にかかわる基礎資料のデータ入手へとつながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義や社会的意義は以下のとおりである。

1. 精神障害者の地域移行と定着支援の場として重要となるGHの職員について、国内で初めて、感情知性の視点から明らかにするものである。2. GH職員の資質向上と職場定着に資する、具体的で有用性の高い研修プログラムを提示するものである。3. 精神障害の地域生活基盤拡充への安定したサービス供給体制の維持につながり、精神科医療の医療費削減と効率的な予算再配分への一助となり、日本国民全体の精神保健の向上に寄与するものである。4. 援助者の感情知性を活用したサポートの方向性を示し、援助者による痛ましい事件を防止するものである、その重要性を社会に広く提起する。

研究成果の概要(英文)： An interview survey was conducted by visiting 10 people who work in a group home for the mentally disabled. The results were compiled and published in Chiba Occupational Therapy, Vol. 11, No. 1. In addition, an interview survey was conducted with the persons in charge of planning training programs for the staff of group homes for the mentally disabled, and suggestions were obtained regarding the necessity of developing training programs and the contents of training programs. These results were compiled, submitted, accepted, and published in Teikyo Heisei University Bulletin, Volume 33. Based on the results of the above research, a meeting of experts was held to discuss the adoption or rejection of the draft program and its contents, and to receive suggestions for additional programs, which led to the acquisition of basic data for the development of the proposed training program.

研究分野：人間医工学 社会学 社会医学

キーワード：障害者福祉 地域保健 地域福祉 作業療法学

### 1. 研究開始当初の背景

精神障害者を対象とした職域における職員の労働環境と業務内容について調査し、職員の資質として職員自身や利用者の感情や情動に視点を置く支援の重要性を明らかにした（水野 2011 2012 2016）。さらに、昨今の入居施設職員による患者への暴力や元介護職員による入所者殺傷事件などの背景にも、こうした職員自身の心のサポートの不足が推測されたと考え、本研究の視点が今や最重要課題となっていると再認識した。そこで、精神障害者むけのグループホーム（以下 GH）において

- ① 職員の職務に適した利用者支援に資する感情知性を明らかにする。
- ② 感情知性の獲得・向上に寄与する研修プログラムの開発が必要と考えた。

そこで「利用者同士の情緒的相互作用を促せば自己表現の幅が広がる（居住支援家サービス事業所職員研究会 2016）」ことを念頭に、研究代表者は、研究課題の核心をなす学術的な問いを「GH の職員には、意志や感情の表出が弱く変性しがちな精神障害の特性を踏まえつつ、利用者の意向をくみ取る力量と、利用者の関わりの中で生じた職員自身の感情の自己認知と対処技能、つまり感情知性の活用能力の向上に資する研修プログラムが必要なのではないだろうか」とした。

### 2. 研究の目的

インタビューおよび GH での参与観察によって、GH 職員に必要な感情知性を質的に明らかにし、感情知性の獲得と向上に寄与する研修プログラムを開発することである。

### 3. 研究の方法

本研究は、まず最近の GH 研究の動向に関する文献検討を行い【4. 研究成果（1）】、次に協力施設への訪問・説明、職員からの同意を得て、インタビュー調査を実施した【4. 研究成果（2）（3）】。これらデータを基に研究分担者と解釈と分析を進めて研修プログラムを起案し、GH 職員等の臨床家と研究者を招聘し Nominal group technique による会合を開催して内容の妥当性を検討して得られたコンセンサスをもって研修プログラムの立案に至った。そして試案の実施、項目ごとの必要性及び内容の検討を行って【4. 研究成果（4）】、最終的に研修プログラムの開発につなげた。

### 4. 研究成果

#### (1) 精神障害者むけグループホームに関する研究動向の検討

精神障害者向けグループホームに関する過去 5 年間の研究動向を探索することで、新たな知見を外観し今後の支援や研究活動における課題を探索することを目的に文献検討を行った。結果、10 編の対象文献が採用され（図 1）、文献の概要と研究の結果から課題となることを検討しまとめた。1）当事者の自立への働きかけ、2）地域連携体制への参加、3）高齢化への対応、4）世話人の業務負担感への対策、5）グループホームの機能に関する探索的研究の必要性、6）グループホームの機能別効果研究の必要性の 6 点について、今後の支援と研究に関する示唆を得られ

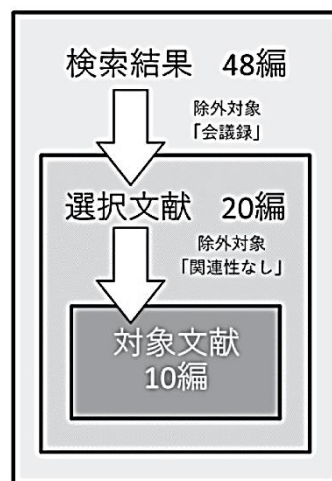


図 1 文献収集と選択過程

た。

(2) グループホーム職員へのインタビュー調査による感情知性に関する質的分析

精神障害者向けのグループホーム職員として求められている感情知性を明確にすることを目的とする。精神障害者向けのグループホームに従事する10名を調査対象とし、訪問によるインタビュー調査とした。得られたデータはBerclson, B.の内容分析によって分析を行った。分析の結果、グループホーム職員の業務上の感情知性に関連する182記録単位を抽出した。次に同一の意味内容の記録単位を20項目にまとめ、さらに高次の概念でカテゴリー化し5カテゴリー〈葛藤の表出の重要さ〉、〈世話人の役割としての情緒的な支援〉、〈感情状態の察知〉、〈不穏時の対応〉、〈適度な関係性の構築〉が抽出された(表1)。これら本研究で得られたカテゴリーを、グループホーム職員の業務における心的なプロセスとして時系列に置き換えてみたところ、それぞれのプロセスで活用されている感情知性とその構成因子との対応が示唆された。

表1 内容分析の結果

＜カテゴリー＞	《同一記録単位》	記録単位（発言コード）	単位数		%
1) 葛藤の表出の重要さ	スタッフ間での葛藤共有	わかってくれる仲間たちがいるから、何とかやってこれているのかなって思っています。(A188)	18	62	34.1
	感情表出	利用者ともめることもあるし、意図しない言葉を使って、それってどうなのって怒られることもいっぱいあります。(A181)	15		
	外部の人との葛藤共有	支援者支援、やっぱりちゃんと聞いてもらうことですね、で共感してもらおうことですね。一人で抱えきれない、支援センターだったり主治医にすぐ相談するんです。(B105)	13		
	表出抑制	本当に腹立たしいし、どう考えても私は悪くないっていう筋に落ちないことでも抱えます(A189)	8		
	対象者との葛藤共有	彼女が話して、私達は聞き手、支援者も彼女もみんなが涙を流すっていうミーティングがあった。痛みを我が事の痛みのように、寄り添う中で自分の中の経験も話す(D158)	8		
2) 世話人の役割としての情緒的な支援	傾聴	向き合える時間は職員はわかっているんで、時間少し作って話を聞く(A85)	18	41	22.5
	家族的な対応	世話人さんに関しては家族とかそういう方面のやさしさとか温かさの支援っていうのは私は求めたい(A181)	17		
	対象者との情緒的交流	その時その時におこってくる楽しいことだったり悲しいことだったり、いららすることだったりいろんなことがうめいてと一緒によく共有する。そんな時間を日々作る仕事なんだと思います。(D254)	5		
	安心感・自己肯定感の提供	安心感とか、この世にいていいんだとか、生きていいんだとか、そういうところを持ってグループホームをでいくのがいいのかなっておも。(D174)	1		
3) 感情状態の察知	利用者の感情状態の察知	多分そうなる(「なんで聞いてくれないんですか」みたいな怒りは前から信号は出ているんじゃないかなって思うんですけど、それに気づいてあげられなかった(A279)	18	36	19.8
	自己の感情状態の察知	私もなんかほっとした、ちゃんともう一度向き合えるなって言う感じはしました。それがなかったらちょっと怖いなって(A289)	15		
	対象者への投影	彼女の親子の苦しみっていうのが私の親子の苦しみだったり関係もどきというか、グループホームで起きてしまう親子関係的なものの中で苦しみもどきだった。(D238)	3		
4) 不穏時の対応	状況逃避	やっぱり利用者さんきついんですよ。あたりが職員に、だからさっさと逃げたいって言うのはよくわかります。(A182)	9	26	14.3
	状況のコントロール	(怒り役はサビ管が引き受け、なだめ役を世話人にやってもらう)クッションで間に入ってもらうとかはやってもらった(A184)	7		
	困惑	言った言わないの些細なケンカ、両方とも間違っていない、でも片方に肩入れもできない、何て言葉を発しているのか、どう返しているのかもわからない(A151)	6		
	時を待つ	時間を置くと自分を我に返る、言い過ぎたっていうことで、また利用者さんから御免なさいっていう言葉をいただけた。(A164)	4		
5) 適度な関係性の構築	自分のメンタルを保つための工夫	オフの時、考えないようにしてる。忘れてる時間がないとだめだと思ってるのでそこでバランスが取れてるんだと思ってます。(B144)	6	17	9.3
	振り返りの機会	ある程度信頼関係ができて、すみませんって謝ってきて、何がいかなかったんだろうか、ちゃんと話したいって、ノートを持ってきて、振り返りました。(A283)	5		
	適度な距離感	熱心には関わっているんだけど巻き込まれない、ちょっと冷静に、(話の見通し)がわかって聞いていると、聞けちゃう時は聞いていますよね、すごいひどい話でもね。(F290)	5		
	個の尊重	メンバーさんも個性がありますのでその個性に対しての対応っていうのがまあまああります。(A300)	1		
計	5	20	182	182	100.0

研究協力者の発言から得られたデータをもとに、GH 職員の業務におけるプロセスと対応する感情知性について検討した(図2)。支援の場であると同時に生活の場でもあるGHでは、対象者は「ホーム(家)」という場で心理的に退行することは少なくない。夜間帯や休日でもサービス供給体制が維持されることが前提のGHの勤務実態において、職員にとっても「プライベートと仕事の境」で気持ちの揺れ動きが日常であり、両価的な感情と心理的な巻き込まれが生じやすい。感情面が揺さぶられ、葛藤的な状況が生じやすい下地が厳然としてそこにはあり、その日常においてGH職員は〈不穏時の対応〉の中で感情をコントロールし、《自己の感情状態の察知》や《対象者の感情状態の察知》し受け止め共感しつつも、表出すべきか抑制すべきかの判断が常に迫られている。Figleyは「人々をケアすることで時には、相手の外傷性の体験に曝された直後の結果として苦痛を経験する」とし共感疲労と呼んでおり、本研究の対象者であるGH職員の感情労働を示している。

孤立しがちな労働環境を背景に、負担感と不全感がGH職員の「燃え尽き」に至るリスクを避けるためにも、＜適度な関係性の構築＞においてみられた職員の個としての努力と、《スタッフ間での葛藤共有》や《外部の人との葛藤共有》など組織や職能団体での体制整備が必要であった。これら支援者支援の手厚い職務環境を背景とすると、GH職員による＜世話人としての情緒的な支援＞は促されて、《対象者との情緒的交流》で観られたように対象者との相互作用から職務への満足度も高まるものと考えられる。GH職員にとって「仕事を続けていくためのキーになる人間関係（環境）」が前提において初めて、業務上求められる感情知性が発揮されて一連の心理的なプロセスが良循環することが示唆された。

(3) 精神障害者向けグループホーム職員への研修企画担当者に対するインタビュー調査における感情知性に関するプログラムの必要性についての質的分析

グループホーム（GH）職員には、利用者の意図や気持ち、心情を把握する能力が求められる。そして、利用者との関係性の中で生じた職員自身の感情の自己認識と対処能力、すなわち感情知性が必要とされる。そこで、本研究では、GHにおける職員の感情知性と職場適応の関係を明らかにし、研修プログラム開発の必要性や研修内容に関する示唆を得ることを目的とした。グループホーム職員の研修企画者2名に半構造化インタビューを実施し、質的な検討を行った。その結果、13の[サブカテゴリー]と2つの【カテゴリー】が抽出された。その結果、無資格者に対する研修は、目的・ニーズ・内容を区別する必要があることがわかった。また、定期的に参加することが難しいことから、ニーズが満たされておらず、オンライントレーニングの必要性が示唆された。

記述データの質的な分析によって【管理者・サビ管研修会】【世話人・生活支援員研修会】の二つにカテゴリーは大別された。サービス管理責任者（サビ管）は、3～10年の実務経験と都道府県の実施する研修修了が要件となっているため一定の専門性が確保されるが、世話人・生活支援員には資格要件がないこと職員の非正規化が進んでいることが二つのカテゴリーの背景にあると考えられる。前者の職名で業務を担当するものの多くは精神保健福祉士や社会福祉士などの保健福祉領域の学習機会を有してきた有資格者が多く、後者は無資格者が多かった。つまりは、研修の目的やニーズとその内容を職名によって差別化する必要性が見いだされた（図3）。

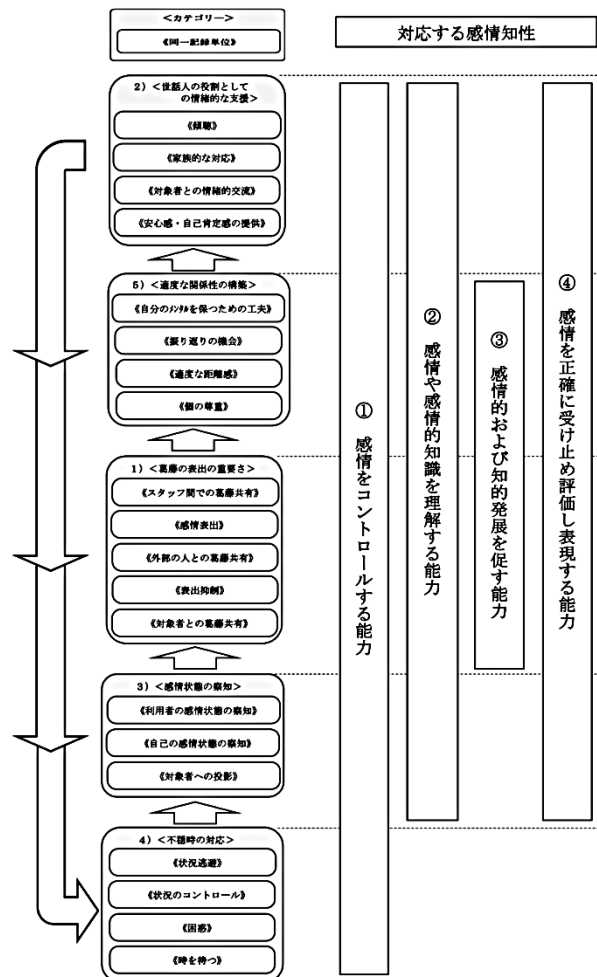


図2 GH職員の業務におけるプロセスと対応する感情知性

また、今回のインタビュー調査から「民間参入への対応」に表されたように、「2006年4月の「障害者自立支援法」の施行で、これまで障害関連事業の認可は社会福祉法人だけだったが、規制が緩和された。さらに2013年4月、「障害者総合支援法」が施行され、民間企業の参入への敷居が低くなり、給付金や補助金を頼りにした企業が大幅に増加した。」これらの潮流に応じて、それらの中に保健福祉的な教育背景を持たない運営者や支援者が増えたことによる弊害が生じている。これら、今まで想定されていたGH職員とは一線を画した対応をしなければならない現状が増えてきており、研修内容もそれらに応じたもの

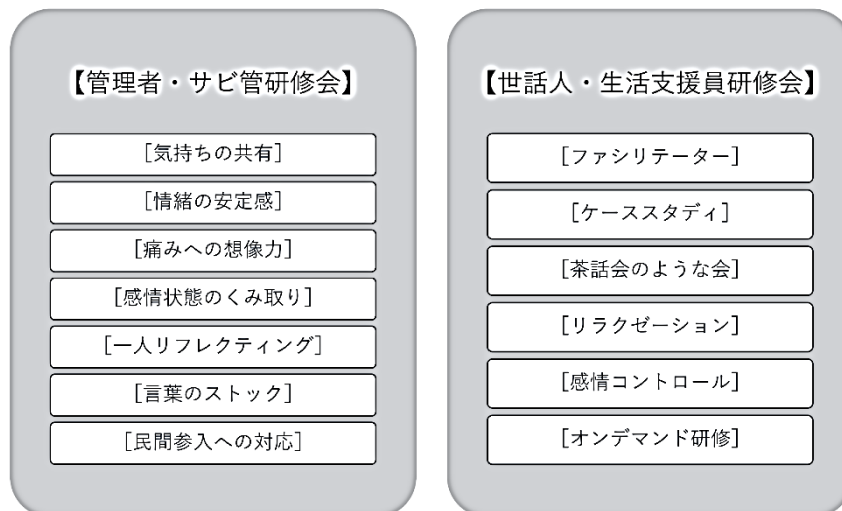


図3 感情知性に関するプログラムの差別化の必要性

が求められてきているなどの新たな側面が明確となった。

(4) 研修プログラムの立案・試案の実施と項目ごとの必要性及び内容の検討

先行研究（水野 2019, 2022）をもとに作成した研修プログラムの試案に対して、GH職員やピアサポーター、地域精神保健福祉の研究者といった専門家集団によってプログラムの内容の妥当性を検討し8つの項目：①感情に関するスキル、②自分の感情に気づく、③他者の感情に気づく、④自分の感情を理解する、⑤他者の感情を理解する、⑥感情のコントロール、⑦感情知性とストレス対処、⑧感情の活用で構成される研修プログラム試案（約 150 分間）を作成した（図

1. 感情に関するスキルを高めよう	(10分)
2. 自分の感情に気づく	(10分)
3. 他者の感情に気づく	(30分)
4. 自分の感情を理解する	(30分)
休憩	(10分)
5. 他者の感情を理解する	(20分)
6. 感情のコントロール	(20分)
7. 感情知性とストレス対処	(10分)
8. 感情の活用	(10分)

図4 研修プログラム試案

4). 研究者が7施設に訪問し、のべ15名のGH職員に対して実施した。対象者には、試案に参加し体感したことに関するアンケートの記載を依頼した。内容は(1)プログラム試案の各項目に対する必要性を5件法(5点満点)で回答し、(2)気づいた点等の自由記載と、(3)全体に対する自由記載の3点を聴取した。

プログラム導入部分である項目①では、感情知性の概念や歴史などの講義が中心で、聞きなれない言葉に抵抗感が見受けられ、理解度に合わせて平易な言葉を選ぶことが課題となった。項目③ではeMotion Feeling Cardsによるゲーム形式のグループワーク、④では自記式の評価尺度(EQS)による自己の感情知性傾向の把握、⑥ではハンモックの使用、⑦ではレーズンエクササイズ、など直感的で体験型のアクティビティを取り入れたのは作業療法士である研究代表者の志向性が反映されており、講義形式をとることが多い研修との違いに新鮮さや楽しみを感じながら参加できたことで高評価を得られた。精神障害者向けGH職員の感情知性を育むプログラム試案の必要性は確認されたが、項目によって改善の余地があることが示唆され、今後の効果検証が課題となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 水野高昌, 上原栄一郎, 栄セツコ, 榊恵子	4. 巻 11
2. 論文標題 精神障害者向けグループホーム職員の業務における感情知性に関する質的内容分析 ~グループホーム職員へのインタビュー調査~	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 千葉作業療法 2022 Vol.11No.1	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野高昌, 上原栄一郎	4. 巻 33
2. 論文標題 精神障害者向けグループホーム職員への研修企画担当者に対するインタビュー調査 感情知性に関するプログラムの必要性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 帝京平成大学紀要	6. 最初と最後の頁 177-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 水野 高昌	4. 巻 30巻
2. 論文標題 精神障害者むけグループホーム (共同生活援助) に関する 過去5年間の国内文献検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 帝京平成大学紀要	6. 最初と最後の頁 211 ~ 220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 水野高昌, 上原栄一郎, 鈴木一広, 斎藤澗
2. 発表標題 精神障害者向けグループホーム職員の感情知性に関するインタビュー調査
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会 第27回 大阪大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上原 栄一郎 (Uehara Eiichiro) (00645327)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授  (22401)	
研究分担者	栄 セツコ (Sakae Setsuko) (40319596)	桃山学院大学・社会学部・教授  (34426)	
研究分担者	榊 恵子 (Sakaki Keiko) (90235135)	神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授  (22702)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	鈴木 一広 (Suzuki Kazuhiro)	特定非営利活動法人おれんじはあと・グループホームなんがい	
研究協力者	斎藤 漑 (Saitou Mio)	特定非営利活動法人おれんじはあと・さんすてっぴ	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------